

5) ポインセチア

ポインセチアはトウダイグサ科の常緑低木で、原産地はメキシコから中南米である。クリスマス頃になると、どこの花屋さんでも売られており、もともこの植物は、赤と緑のクリスマスカラーで構成されるために、クリスマスフラワーとも呼ばれている。高さは3~4m ぐらいに育てることも可能だが、普通は30~60cm ぐらいの高さにして鉢に植え、12月ともなると出荷されている。下葉は10~20cm の卵状楕円形で、縁は波状となり鋸歯がある。ポインセチアは短日植物で、冬に向かって日が短くなると茎頂に花芽を作り、黄色の小花を数個咲かせる。雌雄異花で雌蕊1本を持つ雌花と、雄蕊1本を持つ雄花で構成されている。我々が花と思っているのは実は葉で、花が開く頃に美しく色づき、種類によって赤色、桃色、淡白黄色など色々あって、色のつき方も一面に着色するものや斑になるものなどがある。和名の由来は属名の『*Poinsettia*』によるもので、この植物の発見者アメリカの初代メキシコ大使だった、ポインセット (Joel Robert Poinsett=1779~1851) の名に因む。彼は在任中にメキシコの内乱に介入したかどで、大使を解任されるが、帰国に際してメキシコの花木類を持ち帰り、その一つがこのポインセチアだった。アメリカの植物学者グラハムはこの逸話から、ポインセチア属 (*Poinsettia*) を設けた。しかし分類学的な見地から現在ではポインセチア属は、トウダイグサ科に移され、ポインセチアの名だけが名称として残った。別称としては前述のクリスマスフラワーのほか、ショウジョウボク(猩々木)とも呼ばれ、酒を飲んで赤ら顔になった猩々に例えている。因みに『猩々』は空想の動物で、サル的一种と考えられており、植物の和名にはしばしば登場し、赤く色づくものに用いられることが多い。(03-04-10-01 モミジ 01-03-02-01&08 ユキワリソウの項を参照)。現在の学名は『*Euphorbia pulcherrima*』で、属名は古代ローマ時代の医師であったエウフォルブスの名前に因み、種小辞は「最高に美しい」という意味である。イギリスでは『Christmas flower』または『*poinsettia*』と呼ばれている。

ポインセチアが日本に伝わったのは明治時代の中頃のことで、温室の普及とともに、広く栽培されるようになり、今ではクリスマスにはシクラメンとともに、欠かすことのできない彩りになっている。またヨーロッパ、特に北欧では古くから赤い花には、魔除けの力があると信じられており、ポインセチアは魔除けの草として親しまれてきた。ヨーロッパではクリスマスの頃は花の咲くものが乏しく、燃え立つような真紅を冬じゅう楽しめることもあって、19世紀に伝来して以来たちまち人気となった。その後ドイツやアメリカで品種改良が進み、現在ではさまざまな色のものが栽培されている。

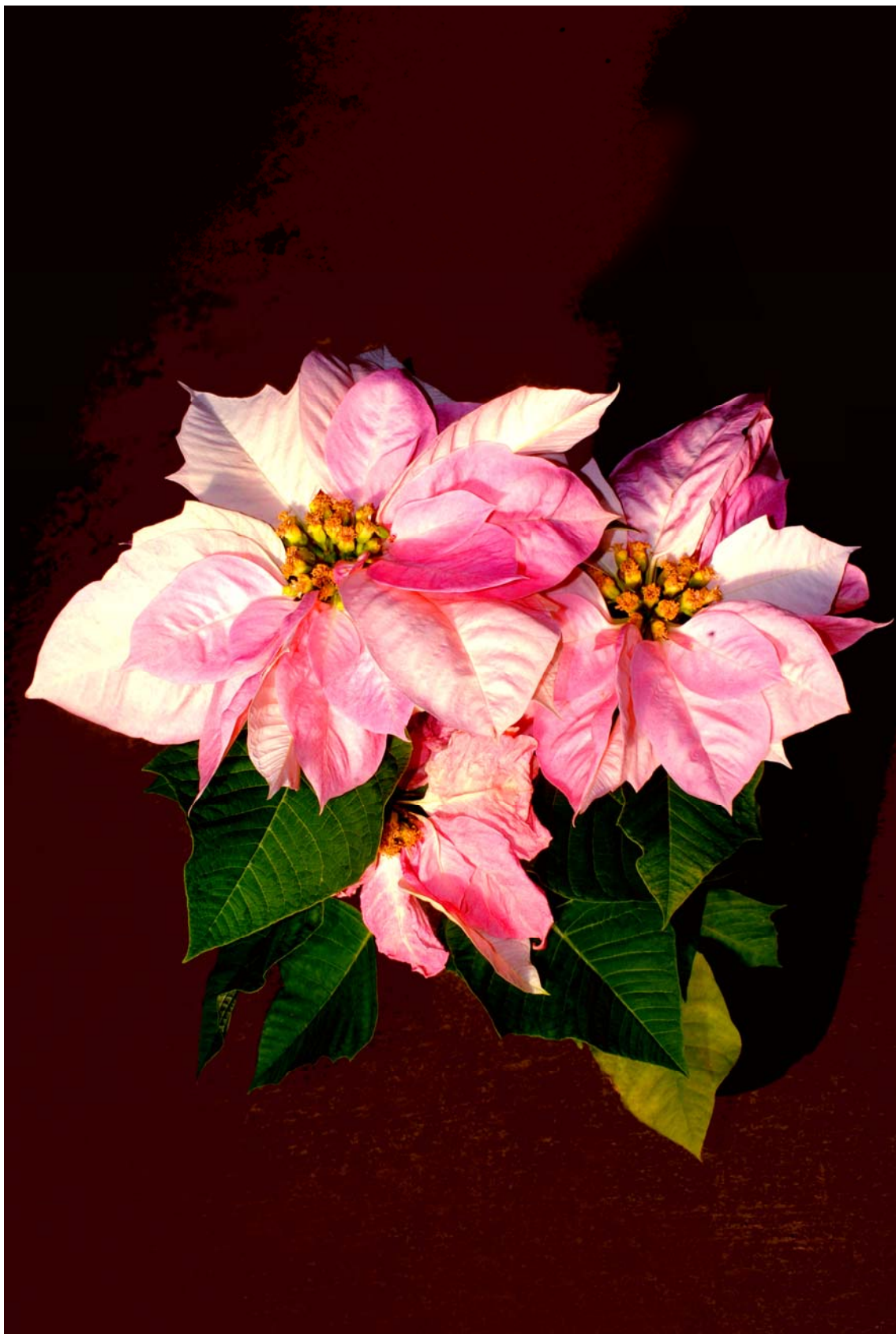
植物の栽培や販売には特許がからみ、栽培品種によっては特許料を支払わなければ販売できないものも多い。植物特許の問題はあまり論じられていないが、イチゴやトマトなど農作物には特許のからんだものが少なくない。特に種子で殖えるものは、種子代の中に特許料が含まれているものも多く、新種が割高なのもそのためでもある。



ポインセチアはクリスマスの必需品。北欧では赤い花には魔除けの力があると信じられ、ポインセチアは急速に広まり、これがやがて日本にもやってきた(埼玉県深谷市)。



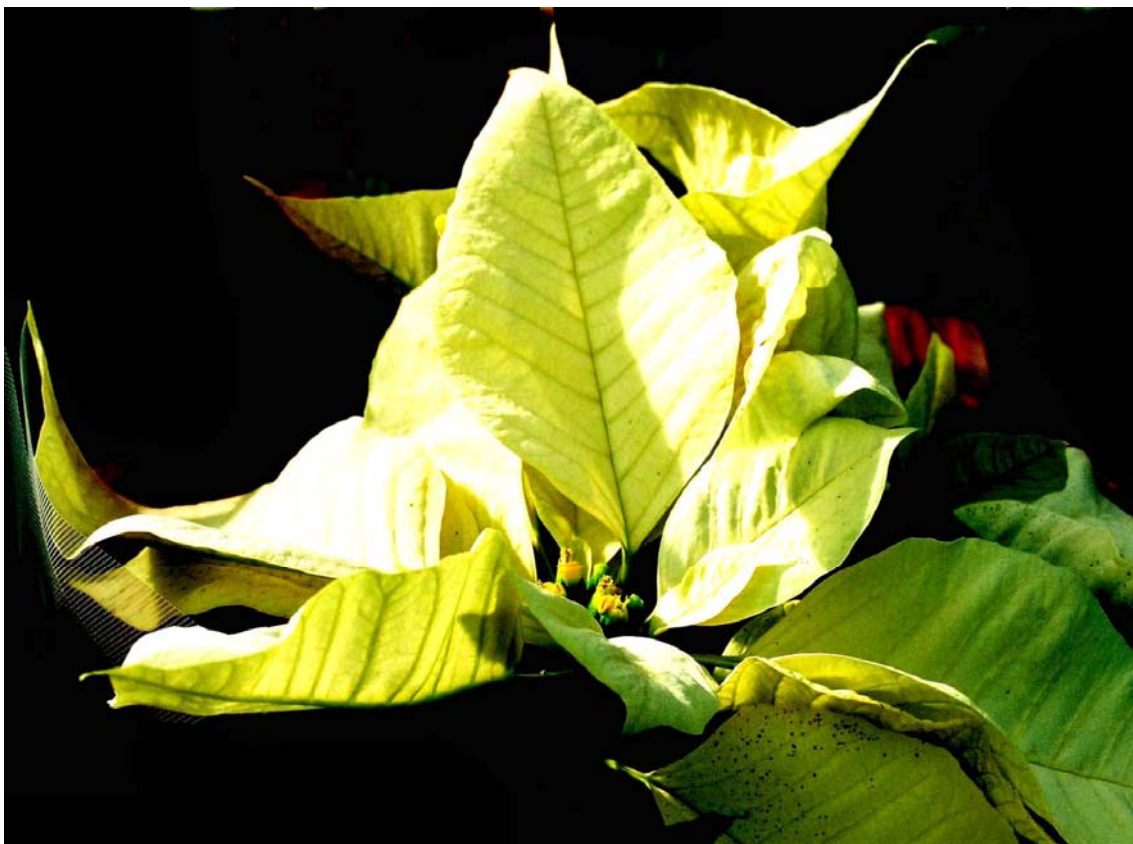
赤色以外にも色とりどりのポインセチアがある(埼玉県川口市安行)。



ドイツやアメリカで品種改良が進み、種々の色が開発されている(埼玉県川口市安行)。



ポインセチアとは思えないような、こんな色の種もある。



さまざまな色に染まるのは葉で、開花期に葉色が変わるハンゲショウと同じである。[目次に戻る](#)